

らない。余が梯子を登らんとした時船頭の一人が遮断した。その理由を船長にたゞすとボケットの工合だと云ふ。誰もボケット・モニーを船頭に呉れて居るのを見つけたから自分が出さなかつた。内外人待遇を異にするかと云へば船長はあの島には迷信があるので異國人を嫌つたのであらうと云ふ。開きたゞせば、異國人を島頂に乗せれば下にある洞門が陥落すると船頭等は信じて居るからだと云ふ。女人禁制は極東にはある蕪國には異國人禁制がある。ボケット・モニーを要求するコーカニーが余をして島上の勝を探らしめなかつた。本船の抜錨を待つ間に短艇から登り来る人には日本人の素早さを感心する「もう行つて来たのか？」と余を取圍んで尋ねるかと思へば、余を呼びかけるに、ミスタ・ブラウン、(Mr. Brown)と云ふ者、ミスタ・ダーク(Mr. Dark)と云ふ奴、オールド・ブラック・フロー(Old Black Flow)と云ふ者がある。何と呼ばれやうとも自分は海上の孤客である怒は損と心得て程々に相手になつて居る。スタファアの島は不快の印象を與へたのみで、即興詩人の心地はどこへやら消え去つて居る。やがてアイオナに船は着く六世紀に愛蘭出身の高僧聖コロンバがこの島に僧院を建て基督教の傳播につとめた。今日猶僧院の一部と寺壁と墓所とが畷々として残存してある。

僧院跡にある墓は蘇國及び愛蘭の多くの豪族王族の墓であるが草生ひ茂り只二つの十字架のみが當時の意匠と傳教の昔か物語つて居る。

一行中に倫敦の大學の教授が居る。名は知らぬが見覚えの顔であり数名の女學生を引き具してある。墓石と十字架とを捉へてありし昔の説明に瀟洒を傾けてゐる。

### 摘 錄

OS. Fujiwara and T. Takayama :

On the Mechanics of the Great

Sagami Bay Earthquake on Sept.

1, 1923. (地震研究所彙報第六號、昭和四年三月)

地殻の渦動を主張する著者が昭和三年に陸地測量部に依つて確かめられた關東地震當時に起つた陸地の水平移動を基礎として關東地震發生の機巧を論じたものである。

陸地測量部發表の結果によれば關東地震當時に起つたと考へられる陸地の水平移動は宛かも伊豆大島北東部の相模灣溝を中心として其の周圍の地域が時計の針と同方向に廻轉せるが如き結果を示して居る。之は下野の晃石山を不動點筑波山と晃石山とを結ぶ方向に變化がなかつたものとしての計算であるが、此く想定して甚しく誤りのなかるべきは晃石山附近には何等の著しき地震の變動が起らなかつたことから大體肯定されねばならぬ。然しながら晃石山を不動點として表現された結果は甲府の北方山地等にも著しき水平移動が起つた結果となり、地震によつて他の變動が殆ど起らなかつた事實と



の十四項の事實をも考察に入れて此の關東地震成因説は之等の事實を満足に説明し得るものとした。即ち

一、第一階の震度を有する地震が一九二三年九月一日午前十一時五十八分に相模灣及び其の周圍の地域に起つた。

二、眞鶴から房州の南端に至る相模灣海岸が少くとも一、二米突然隆起したが、灣の西岸は寧ろ小さく熱海では〇、一乃至〇、七米、初島では〇、九米、大島では變化が認められぬ  
三、相模灣底は一九二二年より一九二三年に至る間に二一〇米沈降し、之を圍んで南東に開口した馬蹄形隆起地域が生じた。

四、津波が相模灣の全沿岸に起つた。

五、相模灣周圍の廣い地域は一八八四年から一九二四年の間に渦動的變位を行つてゐたものである。是石山を不動點とすれば地圖の如き相對運動を示して居る。

以上の事項を説明する爲め説かれたる所を概説すれば渦動的變化は不連続線に於ける歪力によつて生ずる廻轉運動の結果として説明せらるべきもので日本附近に於ける最も重要な不連続は北西部太平洋の沿岸である。此の部分の地殻は全體として南西に移動し其の海陸の相對運動に就いて言へば海底は南西に陸面は北東に移動すると考へられるもので、其の結果は其の界線に廻轉或は渦動變位が生ずる。且つ物質が歪みに強く、壓縮に弱く、張力に對して最も弱い時には歪力線に沿ふて決裂し、地塊の分裂を起し、各地塊が廻轉運動を行ふ様になる。

火山脈の生ずるは此處に壓力が他の地域より著しく働いて居る事を意味するもので、其の壓力存在の理由は不明であるにしても此の事實は地下の定流に對する何等かの抵抗が存在する證據であると考へることが出来る。

其處で伊豆の大島及び之に伴へる火山を此の如き抵抗物と考へれば太平洋底の地下の岩漿の西或は南西に向ふ流れが此處で妨げられ大島の附近及び其の北で南々西又は南に轉ずる様になる。従つて其處に川流が障害物にはゞまれた處に渦卷を生ずる様に時針と同じ方向に廻轉する地動が生ずべきであつて、之は地殻の場合では勿論極めて除々に行はるべきではあるが極限を越えれば地殻を決裂して地震を生じ得る。又た此の如き渦卷に於いて馬蹄形の歪みを生ずることは當然で實驗の結果でも目撃されたと稱してゐる。

著者は斯くの如く關東地震發生の機巧を論じた後今日迄現れた各論者の意見を簡單に批評し各論者の意見も此の説と矛盾するものではなく各其の觀察の方面を異にするに過ぎずとしてゐる。關東地震後既に七年地震現象として觀察せらるべきものは殆ど觀察されつくして仕舞つた後に此の意見が出たのであるから此の議論は甚だ敬聽するに値する。然しながら太平洋と大陸との移動を論じた後、直ちに大島を取つて立論し、此の中間に位すべき關東地方全體の地力學的狀態に言及しないのは地質學者にとりものたため所で、恐らく著者と雖も斯の如き短篇を以つて關東地震の真相を了解して釋然たることを讀者に強制するものではあるまい。(本間)